

## ある「師弟」関係

私は正統的なアカデミズムの世界を歩いてきた人間ではないから、「跡取り」などいない。でも、いくつかの大学で、合わせれば五十年ほどの教員生活を送り、少なくとも数の著作を残してきた。八〇年代と九〇年代の終わりには、それぞれ一二回連続の、当時「市民大学講座」「人間大学講座」と呼ばれていたNHKのテレビ番組に出演したこともある。そんなことがあって、最近、もう定年に近い研究者達と一杯やっている、「私は先生の著作を読んでこの分野に入ったんですよ」とか、「あのテレビをみてアジア研究を始めたんですよ」など、嬉しい話を聞かされる。

そういう人の一人に梶原弘和君がいる。当時、虎ノ門にあった国際開発センターで私がある仕事をやっていた頃、こんな論文を書いたのでコメントしてほしいと同君がやってきた。見知らぬ人物だが、しばらく時間を取って読んだところ、実によくできているではないか。開発経済学の分野でその頃はやりだしていた、生産要素の「価格・代替・生産性」三

渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

者の因果関係について、これを韓国に適用して書いた、それほど長くはないがパンチ力のある論文だった。そんなことがきっかけとなって、共著論文を書いたり、彼の就職先やら海外出張などの世話をさせてもらった。拓殖大学国際開発学部では東南アジア経済の担当教員に就任、ついに終生の「師弟」関係となった。

マクロ数量を取り扱う彼の技倆は高い。アジア各国や国際機関の統計年鑑―当時はみんな分厚い本だった―を手に入れては、幸せそうにそれを眺めている彼の姿が思い浮かぶ。新しい分析手法がみつかるや、当時、筑波大学にあった私の研究室に泊まり込んでひたすらパソコン入力をつづけ、少しの疲れもみせない彼の顔立ちが清々しく懐かしい。この春、冴えない姿で私のところに現れたのだが、つい先週、度重なる抗がん剤の注入に耐えられず息を引き取ったという報せが入った。私が八十歳を超えたのだから「弟子」達がかくなるのも致し方ないことなのだ。と、わが身の老いの深さを知るのみである。